

『即身成仏義愚草』 「即身成仏自宗不共事」  
について

研究生 別所 弘淳

本発表は『即身成仏義』を取り上げた伝法会に際して著されたとされる、頼瑜（一二二六～一三〇四）撰『即身成仏義愚草』（以下『即身義愚草』）に収められる「即身成仏自宗不共事」の問答を中心としながら、頼瑜の『即身成仏義』の随文判釈書である『即身成仏義顕得鈔』（以下『顕得鈔』）や天台宗側の諸著作をたよりに、真言宗・天台宗が即身成仏をどのように捉えていたのか、その一端を探るものである。

当問答は「即身成仏が真言宗不共の説であるか否か」を判じる両方論義である。答者は「真言不共の説である」ことを主張し、問者の「不共の説ではない」という主張に対しては会通を行って解決を図っている。

問者は即身成仏が『法華経』の童女成仏や『菩薩瓔珞経』・『仁王経』・『法華文句記』等に説かれていることを根拠として、即身成仏が真言不共の説であることを否定しているが、答者の立場は「即身成仏〓妙覚成仏」であり、初住成仏を主張する天台等の即身成仏は二生成仏（頼瑜は『菩提心論初心鈔』にて一生成仏を「即身成仏」、二生成仏を「即身成菩提」とする）であって、「密教に説かれる即身成仏とは異なる」と主張する。しかし円仁・円珍につ

いては天台学匠であるものの、密教義の即身成仏を主張する点から、（当論義においては）答者の主張の根拠として用いられている点が注目される。

これと同様の議論が『顕得鈔』においても行われており、そこでも頼瑜は「即身成仏〓妙覚成仏」であり、初住成仏を説く天台の即身成仏を二生成仏であると判じ、即身成仏が真言不共の説であることを主張している。

但し、当然のことながら天台宗は顕密一致を主張する為、頼瑜と同時代の天台僧浄明（く一二四〇～一二八六）撰述の論義書『天台問要百題自在房』でも「即身成仏は顕密両教に亘る」と判じている。また安然が『菩提心義抄』にて「初住人亦修『等覚・妙覚行相法』と初住成仏と妙覚成仏の違いをなくそうと試みた態度からも、台密教学を形成するうえで顕教の即身成仏（童女成仏）と密教の即身成仏との相違について解決することが不可欠な問題であったということができる。

日本天台が「即身成仏は顕密両教に亘る」と主張するうえで最も問題となるのが、『菩提心論』に「唯真言法中即身成仏故於『諸教中』闕而不書」とあることであり、円珍や安然、証真といった学匠が、様々な解釈を以て解決しようとして試みたのである。